

豪で邦人抑留巡りシンポ

収容経験者ら参加、慰霊祭も

太平洋戦争中のオーストラリアで、多くの民間の日本人が抑留されていた。そんな知られざる歴史



強制収容経験者やその家族たち―豪州東部カウラ

を伝えようと、豪州東部のカウラ市で7日、研究者らが企画したシンポジウムが始まった。9日には、現地にある日本人戦没者墓地で慰霊祭も行われる。

豪州では太平洋戦争中、豪州やニュージージーランド、オランダ領東インド諸島(現インドネシア)、ニューカレドニアなどに住む民間の日本人や日系人がカウラなどに強制収容された。最多時は約4300人に達した。日本人兵士の捕虜も

収容されており、特にカウラの捕虜収容所は1944年8月に兵士らの集団脱走事件で捕虜234人の死者を出したことで知られる。ただ、民間人抑留者についてはほとんど知られておらず、収容所で亡くなったとされる約200人の墓は戦後、兵士らが眠る日本人戦没者墓地へ移された。

シンポを企画した豪クインズランド大学の永田由利子氏によると、戦時中は豪州政府の白豪主義政策のため、日本人労働者は永住が認められなかった。

シンポでは、日本人家族の収容所の体験談などが紹介された。出席した村山洋子さん(78)は、両親とニューカレドニアから豪州南東部のタツラ収容所に送られ、6歳から10歳まで過ごした。「汚い船で豪州へ連れられて来たのを覚えている」と振り返った。

(カウラ―郷富佐子)